
短いキス

silvia

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

短いキス

【Nコード】

N0452D

【作者名】

silvia

【あらすじ】

出会い、キッカケは本当に偶然です。そして、ドキドキすることもある。大学生生活の楽しい時間が始まる予感。

「先輩！」

私は、前を歩いていた石田先輩に後ろから声を掛けた。

私の大学は男が7割に対して3割が女。

だから、私の周りには普通に男の人の割合が高い。

勿論、石田先輩も男の先輩である。

「おう、珠樹か。もう、講義ないのか？」

「終わりましたあ。」

「じゃあ、送ってやってやる」

そう言って車のキーを出した。

「ラッキー」

アパートには歩くには遠く、車を持つにはその前に免許取らなくてはならず・・・。

中途半端なところに大学があるため交通手段も微妙。

だから、学生の車の所有率が高い。

「そうだ、お前に土産買ってきたんだよ。俺の部屋よってけ」

「お土産なんてうれしい。ありがとうございます」

結構、この先輩には可愛がってもらっている。元々面倒見のいい先輩ではあるが、多分後輩の中でも特に可愛がってもらっていると思う。

「お邪魔しまあす」

部屋にお邪魔しようとした時

「戻ってきたかあ？」

と後ろから急にドアを持たれて思わずよろけてしまう。

「あ、ごめん。つてあれ？」

「・・・こんにちわ・・・。」

動揺してしまった。

数回、見かけたことのある、よく揉め事を起こす彼女の彼氏として噂されていた、けれど一度も話したことのない先輩の岡田さんだったから。

「何で珠樹ちゃんがここに？」

「つて言うか、なんで私の名前知ってるの？なんで、ここにいるの？つて言うか、私なんでドキドキしているの？」

「おう、ただいま。珠樹に実家の土産渡そうと思って」

「あ、そっかそっか」

背の小さい私の上で飛び交う会話。

話に混じる事もできずどうしたらいいかわからなくなっていたとき

「とりあえず、ここの玄関小さいし寒いから中に入ってくれない？」

と笑顔で石田先輩が言った。

「あ、ごめんなさい」

慌てて中にお邪魔する。

「そつえば言ってなかったよな。一週間前からうちの隣に引っ越してきたんだよ」

と言って岡田先輩を紹介してくれた。

「よろしくね」

「こいつは俺の後輩で・・・」

「知ってるよ、珠樹ちゃんだろ？」

「おう。って、何で知ってるんだ？」

「そりゃあ、この女の少ない大学でなお且つお前の後輩とかだったら名前と顔ぐらい一致するさ」

私の名前を知っていた理由がわかり思わず

「なるほど」

と言っていた。

その後、何故か3人で大いに盛り上がり夕食も一緒に食べに行くことになった。

「ちよつと、俺着替えたいしシャワーも浴びたい。珠樹、岡田の部屋で待ってて」

と言って、石田先輩に部屋を追い出され2人で岡田先輩の部屋に行くことに……。

「っていうかお邪魔していいんですか？」

「……、駄目でしょう？一人暮らしの男の部屋に一人出来ちゃ」

「え……、だってそれだところでは遊べないですよ。それとも私先輩に襲われちゃうんですか？」

そんな事をいいながら、岡田先輩の部屋にお邪魔する。

「……、だから簡単に男の部屋に入るなって。俺が襲ったらどうする？」

「岡田先輩ならいいですよ」

急に二人きりになって緊張して、けどこのドキドキは緊張だけではない。なくて。

ましてこんな会話をしていると尚更ドキドキはとまらなくて。

「おまえねえ、そんな事簡単に言ったら駄目だろう」
そう言いながら短いキスをした。

本当に何の前触れもなくいきなりでなんていって言いかわからず・

・
「あの・・・、石田先輩が・・・」

「珠樹ちゃん、石田の事好きなの？」

ビックリしたように聞かれた。

「いや、好きじゃないです」

「よかったあ」

そう、優しく笑うともう一度キスされた。今度は手を握られながら。

「先輩、彼女は・・・？」

「言ってなかったけ？もう大分前に別れてるよ」

「あ、そうなんですか？」

「そ、だから」

だから？

答えを聞く前にまたキスされる。

ピンポン

「用意できたぞ。はらへったあ」

石田先輩が玄関を開けながら声を掛けてきた。

「うわ、はーい」

思わず動揺してしまう。

岡田先輩の顔がまともに見れない。

「今行く」

岡田先輩が優しくニコツとしながら私の顔を覗き込む。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0452d/>

短いキス

2010年10月23日01時12分発行